【論文】

King Lear における美徳の死[1]

利根　有紀

本稿では、William Shakespeare 作 *King Lear* の最終幕で描かれる Cordelia の死とその悲劇性を、中世道徳劇の伝統という観点から論じていきたい。このように書くと、20 世紀前半の A.C. Bradley に代表されるような、魂救済の物語というキリスト教の枠組みでの解釈を思い浮かべるかもしれない[2]。しかし、道徳劇の伝統を有していると指摘することがすなわち、King Lear が道徳劇と同じ世界観を提示していると主張することではない。むしろ本稿の目的は、Shakespeare が道徳劇の伝統を利用しながら、道徳劇とは異なる独自の世界観を構築していることを明らかにすることにある。

Shakespeare の *King Lear* には中世道徳劇あるいは道徳的インタールードとの類似点が散見される。Maynard Mack が *King Lear* に道徳劇の影響が見られると主張した（56-63）ことはよく知られているが、Mack に限らず、これまで *King Lear* と道徳劇の類似点に注目した研究者は少なくない[3]。しかしその多くが類似についての詳細な分析に至っておらず、特に最終幕の Cordelia の死を道徳劇の伝統を利用した Shakespeare の劇作術という観点から論じた研究は見当たらない。比較的詳細に道徳劇の影響を指摘した Mack でさえも、この点については言及していない。

King Lear において、Shakespeare は「誘惑—堕落—改悛—救済」という道徳劇の典型的なプロットを採用している。しかし最終幕では、それまで忠実に守ってきた道徳劇のプロットをあえて覆すような劇展開を仕組み、道徳劇の教訓的なストーリーとはまったく異なる世界観を提示している。本稿ではまず、セクション１で材源との比較を手掛かりに主筋の Lear の人物造形について道徳劇との類似点を考察し、セクション２では副筋の Gloucester の造形にも道徳劇との共通点がみられることを指摘したい。さらにセクション３では、Edmund に見られる道徳劇の Vice の性質について考え、セクション４では、それまでの議論を踏まえて、道徳劇のプロットを利用した Shakespeare の劇作術を明らかにするつもりである。特に Cordelia の敗北と死という結末について、Shakespeare がこの悲劇的な結末を効果的に演出するために、道徳劇のプロットを利用していることを指摘したい。

1　Lear の人物造形にみられる道徳劇的側面

Shakespeare の *King Lear* の主筋には直接影響を受けたと考えられる作者不詳の劇作品 *The True Chronicle Historie of King Leir* をはじめ[4]、Raphael Holinshed の *The Historie of England*、John Higgins の *The Mirror for Magistrates*、Edmund Spenser の *The Faerie Queene* など複数の材源があると考えられているが、Shakespeare の *King Lear* とこれらの材源には大きな違いがふたつある。ひとつは物語の前半、Shakespeare の *King Lear* で言うと１幕１場から２幕４場までの主人公 Lear の描写方法である。材源では娘達の愛情を試す場面で、末娘（Shakespeare の Cordelia にあたる人物）に期待を裏切られた Leir[5] は怒りにかられ、末娘に与えるべき財産も上の娘達に分け与え、末娘を追放する。しかしその後、上の二人の娘達は Leir に冷酷な仕打ちをし、Leir は何もかも失うことになるというのがすべての材源に共通するストーリーである。*The True Chronicle Historie of King Leir* では、怒りにかられ末娘の Cordella を追放し、王国を長女 Gonorill と次女 Ragan に分け与えた Leir だが、その後 Gonorill に理不尽な言いがかりをつけられたうえ、冷たく扱われることになる。さらに Gonorill は、Leir が Ragan を悪しざまに言っていると嘘の手紙を書き、使者に命じて Ragan に届けさせるが、Ragan はその使者に Leir の殺害を命じている。Gonorill から冷酷な仕打ちを受け涙を流す Leir の姿は、Shakespeare の怒り狂う Lear とはずいぶん違った印象を与える。

Shakespeare は *King Lear* の１幕１場から２幕４場にかけて、高慢で怒りっぽいという Lear の短所を材源よりも強調して描いている。１幕１場で、Lear は Cordelia の誠実な言葉に怒り、親子の縁を切る。また、それをいさめようとした Kent も追放している。このような高慢で怒りっぽい Lear の姿は、材源では愛情試しの場面でのみ描かれていたのに対し、Shakespeare の *King Lear* ではその後も引き続き Lear の高慢と激しい怒りが描かれている。

GONERIL　You see how full of changes his age is. The
observation we have made of it hath not been little.
He always loved our sister most, and with what poor
judgment he hath now cast her off appears too grossly.
REGAN　'Tis the infirmity of his age, yet he hath ever but
slenderly known himself.
GONERIL　The best and soundest of his time hath been but
rash; then must we look from his age to receive not

alone the imperfections of long-engraffed condition,
but therewithal the unruly waywardness that infirm
and choleric years bring with them.
REGAN　Such unconstant starts are we like to have from
him as this of Kent's banishment.

(1.1.290-300)[6]

これは愛情試しの場面の直後に来る Goneril と Regan の対話だが、ここでは二人の言葉によって Lear の短所が指摘されている。*The True Chronicle Historie of King Leir* における Gonorill と Ragan の Leir に対する不当な非難と異なり、ここでの Goneril と Regan の Lear に対する評価は必ずしも不当なものとは思えない。Goneril は Lear の Cordelia に対する仕打ちを引き合いに出し、Regan は Lear の Kent に対する仕打ちに言及している。観客は Lear が Cordelia と Kent を怒りにかられて追放したことを知っているため、二人の名前を出して Lear の分別のなさ、気性の荒さを指摘する Goneril と Regan の言葉は、正当な意見として認識されると考えられる。さらに１幕３場以降も、引き続き Lear の高慢と怒りっぽさが強調されている。１幕３場では Goneril とその家来 Oswald の対話によって、Lear が Goneril の家来を殴ったり、些細なことで文句を言うことや、お付きの騎士たちも乱暴で手がつけられないということが明らかにされる。また１幕４場では Goneril が Regan に宛てて手紙を書いているが、'What he[Lear] has uttered I have writ my sister' (1.4.325) と言っていることからも、その手紙の内容は *The True Chronicle Historie of King Leir* で Gonorill が書いたでたらめの手紙とは違い、事実に基づいた内容であることがわかる。

では、Shakespeare がこのように愛情試しの場面以後も Lear を高慢で怒りっぽい人物として描き続けた理由はなんだろうか。材源の劇では Leir が娘達から不当な仕打ちを受ける姿が描かれているが、裏返すとそれは、Leir の過ちは娘達の本当の姿を見抜けなかったことだけで、上の二人の娘達から受ける冷酷な仕打ちとそれに続く苦難は必ずしも Leir のせいではないということになる。一方 Shakespeare は、愛情試しの場面以後も Lear の高慢と怒りを強調して描くことで、Lear の苦難は Goneril と Regan の冷酷さだけが原因ではなく、高慢で怒りっぽい彼自身の性格がもたらしたものであることを強調しようとしている。Lear の高慢はやがて嵐の中で哀れなものたちによせる憐憫へと変わるが、Goneril と Regan に対する激しい怒りは悲しみと共に Lear を狂気に追いやることになる。

2　*King Lear* の道徳劇的構造

Shakespeare の *King Lear* において、副筋の Gloucester と Edmund、Edgar 父子の関係が主筋の Lear と３人の娘達の関係と対応する形で描かれていることは明らかである。Gloucester の苦難を引き起こす Edmund の描かれ方を見てみると、主筋で Lear の苦難が彼自身の高慢と怒りから生じているのと同様に、副筋の Gloucester の苦難の原因も彼自身の罪にあることがわかる。Shakespeare は Gloucester と Kent の対話を使って、Edmund が Gloucester の不義の子であることを開幕早々観客に伝えているが、ここで Gloucester は、Edmund が不義の子であることを 'sport'「楽しみ」という言葉を使って悪びれもせずに認めている。

> Though this knave came something saucily into the world
> before he was sent for, yet was his mother fair, there was
> good *sport* at his making, and the whoreson must be
> acknowledged. …　　(1.1.20-23, italics mine)

さらに、２幕１場冒頭の Edmund の独白は、彼の庶子という出自が Gloucester と Edgar への悪事の動機になっていることを伝えている。

> Thou, Nature, art my goddess; to thy law
> My services are bound. Wherefore should I
> Stand in the plague of custom, and permit
> The curiosity of nations to deprive me?
> For that I am some twelve or fourteen moonshines
> Lag of a brother? Why *bastard*? Wherefore *base*?
> When my dimensions are as well compact,
> My mind as generous and my shape as true
> As honest madam's issue? Why brand they us
> With *base*? With *baseness*, *bastardy*? *Base*, *base*?
> Who in the lusty stealth of nature take
> More composition and fierce quality
> Than doth within a dull stale tired bed
> Go to the creating of a whole tribe of fops
> Got 'tween a sleep and wake. Well, then,

Legitimate Edgar, I must have your land.
Our father's love is to the *bastard Edmund*
As to the *legitimate*. Fine word, 'legitimate'!
Well, my *legitimate*, if this letter speed
And my invention thrive, Edmund the *base*
Shall top the *legitimate*. I grow, I prosper:
Now gods, stand up for *bastards*!

(1.2.1-22, italics mine)

この独白はこれから悪事を行うという Edmund の決意表明でもあるが、この 20 行程度の独白の中に、Edmund が庶子であることを意味する 'bastard'、'bastardy'、'base'、'baseness' といった単語が 10 回も使われている。特に 10 行目では、'base'、'baseness'、'bastardy'、'base'、'base' と畳みかけるように繰り返されている。また、これらの単語と対比させる形で、Edgar が嫡子であることを示す 'legitimate' という単語も 5 回使われていることがわかる。このように Shakespeare は、Gloucester と Edgar に対して行う Edmund の悪事には、庶子という境遇についての不満が動機としてあること、そしてこの後の Gloucester の苦難は彼自身の不義が原因であることを強調していることになる。

さらに、Edmund にだまされ Edgar が自分の命を狙っていると疑う Gloucester が最近の日食・月食は良くない前兆だと嘆くと、Edmund は次のようなせりふで嘲笑している。

This is the excellent foppery of the world, that
when we are sick in fortune, often the surfeit of our
own behaviour, we make guilty of our disasters the sun,
the moon, and the stars; …
…
… An admirable evasion of
whoremaster man, to lay his goatish disposition on the
charge of a star. …

(1.2.118-128)

ここでも、Gloucester の不倫という罪が Edmund を悪事に走らせ、その結果 Gloucester が Edgar の裏切りを疑うはめになったということが示唆されている。また 3 幕 4 場では、松

明を持った Gloucester が登場する直前に、Fool が 'Now a little fire in a wild field were like an old lecher's heart'(109-110) と言っているが、このような趣向もまた観客に Gloucester の姦淫という罪を印象付けるのに役立っている。

Gloucester の苦難の原因となった Edmund の存在を Gloucester 自身の罪と結びつけるせりふは最終幕にも見られる。

> The gods are just and of our pleasant vices
> Make instruments to plague us:
> The dark and vicious place where thee[Edmund] he[Gloucester] god
> Cost him his eyes.
>
> (5.3.168-171)

この最終幕の Edgar のせりふも、Edmund に裏切られた Gloucester が Cornwall と Regan の怒りをかい、両目をくり抜かれることになったのは、Gloucester 自身の不義が原因であるということを観客に伝えている。

Lear の場合は高慢で怒りっぽい性格が彼の苦難の原因となるよう描かれているが、Gloucester の場合は不義という彼自身の罪が苦難の原因になるよう描かれており、いずれも己の罪ゆえに苦難を経験する人物として描かれていることになる。邪悪な庶子と善良な嫡子、庶子によって苦難を経験する父親というモチーフ自体は、副筋の材源とされる Philip Sidney の *Arcadia* にも見られる。Shakespeare は邪悪な庶子に Vice 的な要素を付与し、庶子の悪事と父親の罪という因果関係をより明確な形で描き出している。主筋と副筋の類似性が Shakespeare の劇作術において重要な位置を占めていることを考えると、Shakespeare が Sidney の *Arcadia* を副筋の材源に選んだ理由の一つが主筋との類似性にあったと推測できる。

3　Edmund にみられる Vice の性質

次に、*King Lear* と道徳劇の類似点のなかでおそらく最もよく指摘してされてきた、Edmund に見られる Vice の特徴について考えてみたい。Shakespeare の悲劇には、中世の道徳劇やインタールードで活躍した Vice の性質を受け継ぐ悪党達が登場する。Vice は登場人物名ではなく、人間の悪徳を擬人化した登場人物（vices）のうち特に目立つリーダー格の登場人物が大文字の Vice と呼ばれていた。Vice という表記が登場人物表やト書きに現れるようになるのは 16 世紀前半に制作された John Heywood の *The Play of the Weather* 及び *A*

Play of Love 以降のことであるが、初期道徳劇の *The Castle of Perseverance* (1400~1425 年) や *Mankind* (1465~1470) を読んでみると、この頃からすでに Vice と呼ぶにふさわしいリーダー格の悪徳が存在していたことがわかる。

もう一度２幕１場の Edmund の独白を見てみよう。

Thou, Nature, art my goddess; to thy law
My services are bound. Wherefore should I
Stand in the plague of custom, and permit
The curiosity of nations to deprive me?
For that I am some twelve or fourteen moonshines
Lag of a brother? Why bastard? Wherefore base?
When my dimensions are as well compact,
My mind as generous and my shape as true
As honest madam's issue? Why brand they us
With base? With baseness, bastardy? Base, base?
Who in the lusty stealth of nature take
More composition and fierce quality
Than doth within a dull stale tired bed
Go to the creating of a whole tribe of fops
Got 'tween a sleep and wake. Well, then,
Legitimate Edgar, I must have your land.
Our father's love is to the bastard Edmund
As to the legitimate. Fine word, 'legitimate'!
Well, my legitimate, if this letter speed
And my invention thrive, Edmund the base
Shall top the legitimate. I grow, I prosper:
Now gods, stand up for bastards!

(1.2.1-22)

ここで Edmund は観客に本心を明かし、手紙を使った企みがうまくいけば庶子である自分が嫡子である兄 Edgar を越えることができると言っている。L. W. Cushman が指摘するように、このように独白や傍白を使って観客に邪悪な企みを打ち明けるのは、Vice の特徴のひ

とつである（137、140）。例えば 1508 年頃に製作された道徳劇 *Mundus et Infans* では、Vice である Folly（「愚行」）が次のような傍白を行っている。

> Aha, sirs, let the cat wink!
> For all ye wot not what I think.
> I shall draw him such a draught of drink
> That Conscience he shall away cast.　　(648)[7]

この後、Folly は主人公である Manhood（「成人」）に酒を飲ませて堕落させており、観客に打ち明けた通りに悪事を実行していることになる。また、道徳劇の Vice の目的は主人公である「人間」を欺き、堕落させることにある。刃物などの武器で「人間」に危害を加えるといった直接的な悪事よりも、たくみな言葉によって誘惑したり欺いたりすることで行われる悪事が Vice の特徴と言える。偽の手紙を使って父 Gloucester に兄 Edgar が父の命を狙っていると信じ込ませる Edmund は、欺きによって悪事を行う Vice の姿と重なる。

このように Vice 的な特徴を有する Edmund だが、この独白では同時に一見 Vice とは相容れないと思える一面も見せている。一般的に Shakespeare の悲劇において道徳劇の Vice の性質を受け継いでいるとされるのが、*Titus Andronicus* の Aaron、*Richard III* の Richard[8]、*Othello* の Iago、そして *King Lear* の Edmund である。Edmund には明らかに Vice の特徴が見られるが、先行研究においては Vice との類似点が Aaron、Richard、Iago ほどには詳細に分析されてこなかったようである。その一番の理由は、他の悪党達ほど Vice の性質が明確に描き出されていない、言い換えると、Vice の枠に当てはまらない人間性がより前面に出ているということにあるのではないだろうか。

道徳劇やインタールードに登場する Vice は悪徳を愚意的に表現し、存在自体が悪であるため、何故悪を行うのか、何故人間を堕落させようとするのかといった動機は問題にならない。しかしこのような Vice の寓意性は、Shakespeare 劇の中では異質なものとして注目されることになる。例えば *Othello* の Iago の場合、彼は Othello が自分を差し置いて Cassio を副官にしたことや Othello と妻 Emilia の不倫疑惑が Othello へ悪事をはたらく動機であると言っている。しかしそれが本当に Othello への悪事の動機なのか、そもそも動機あっての悪事なのかが必ずしも明確とは言えず、研究者の間でも問題視されてきた。Iago に見られるこのような動機の欠如、あるいは動機のあいまいさは不自然なものではあるが、動機なく悪を行い、悪を行うことそれ自体を楽しむ Vice の性質を受け継いでいるとも言える。これに対して Edmund は、悪事の動機が彼の庶子という出自にあることが強調され、Gloucester

と Edgar に対して行う Edmund の悪事は、嫡子である Edgar が相続するはずの領地を自分のものにするという目的にかなっている。

さらに Edmund の場合、Vice の性質を受け継ぐ他の Shakespeare の悪党達には見られない言動が見られる。Vice は劇の最初から最後まで悪徳を体現する人物として登場し、自らの悪事を誇ることはあっても途中で改心して悔い改める姿はあまり見られない。また道徳劇においてはしばしば、Vice は舞台上で罰を受けたり、罰を受けるために引きずられて退場したり、あるいは他の登場人物の口からその罪にふさわしい罰を受けたということが明らかにされる。このような Vice の性質は劇構造にも深く関わっている。Cushman は、16 世紀後半以降に製作された悲劇や後期道徳劇では Vice の運命が最終幕の重要な部分を構成し、Vice にはその行いにふさわしい正義が下されると指摘しているが (120)、Shakespeare の悲劇においてもこのような Vice の特徴が明確に描き出されている。*Titus Andronicus* の Aaron は最後まで自分が行った悪事の素晴らしさを誇り、Lucius によって胸まで地面に埋め餓死させるという残酷な罰が下される。*Richard III* では５幕３場で夢の中に現れた Richard の犠牲者達の亡霊が彼の良心の呵責を反映していると考えられるが、目を覚ました Richard はその良心を否定する。また、この夢の場面で見せる Richard のおびえた様子や最後に Richard が殺されるという結末を考慮すると、４幕３場から最終幕まで続く Richmond との戦いは、Richard にとってそれまでの悪事への罰であると考えられる。悪人である Richard が殺され、善人である Richmond が勝利するという最終幕の構図も、悪が罰せられ善が勝利する様子を対比して描く道徳劇と重なる。*Othello* でも、Iago は最後まで不遜な態度をとり続け、悪事を後悔することはない。また、Lodovico は最後のせりふで Iago を拷問し処刑することを命じており、Iago が厳しく罰せられることが観客に伝えられている。

このように最後まで悪事を後悔することなく厳しい罰を受ける Aaron、Richard、Iago と異なり、Edmund は最終幕で簡単に改心している。

> This speech of yours hath moved me,
> And shall perchance do good; …
>
> (5.3.198-199)

これは Edgar が、自分自身と父 Gloucester の苦難、そして Gloucester の死について語ったせりふの直後に来る Edmund のせりふである。ここで Edmund は Edgar の話に心を動かされたと言い、改心する様子を見せている。さらに、Edmund を愛する Goneril が、同じく Edmund を愛する Regan を毒殺し自らも自殺したということが伝えられた後、舞台上に運

び込まれた二人の遺体を前にして交わされる Edmund と Albany の対話も見てみよう。

EDMUND　Yet Edmund was beloved:
The one the other poisoned for my sake,
And after she slew herself.
ALBANY　Even so; cover their faces.
EDMUND　I pant for my life. Some good I mean to do,
Despite of mine own nature. Quickly send –
Be brief in it – to the castle, for my writ
Is on the life of Lear and on Cordelia;
Nay, send in time.
(5.3.238-245)

ここでの Edmund のように自分の罪を償おうとする姿は、道徳劇の Vice にはあまり見られないものである。

また Edmund に与えられる罰についても、Vice、あるいは Shakespeare 悲劇に登場する Vice の性質を持つ他の悪党達との違いが目につく。Lear と Cordelia の処刑命令を撤回した Edmund は、Albany の 'Bear him hence awhile' (5.3.254) という言葉で退場させられるが、この Albany の言葉は、Edgar との決闘で受けた傷以上の罰を Edmund に与えることを示唆するものではない。そして次に Edmund の名前が出てくるのは、彼が舞台裏で息を引き取った後になる。Edmund の死は Albany の 'That's but a trifle here.' (5.3.294) という言葉であっさり処理され、観客の意識が Edmund の死、すなわち Edmund に与えられた罰に向けられることが妨げられている。

このように Edmund が Vice 的な性質と Vice とは相容れない性質の両方を有していることについて、Shakespeare が Vice の枠組みにとらわれないキャラクター作りをした結果だと考えることもできる。実際 Shakespeare は、Aaron、Richard、Iago においても、伝統的な型にはまった Vice には見られない個性を与えるということをしている。しかし Edmund の場合、Vice 的な造形とは相いれない人間的な描写は、次のセクションで論じる最終幕の悲劇的な結末を効果的に演出するという作劇上の工夫が生み出した、副次的な人物造形の妙であったように思える。

4　美徳の死

主筋の材源と Shakespeare の *King Lear* には、すでに指摘した Lear の描写以外に、もうひとつ大きな相違点がある。材源では Leir が末娘とともに王権を取り戻し、ひとまずはハッピーエンドで終わるのに対して、Shakespeare の *King Lear* は Lear と Cordelia の死という悲劇的な結末を迎える。この結末については賛否両論あり、例えば Lear と Cordelia の死があまりにも突然で不可避なものとして描かれていないことを指摘したうえで、Lear は Cordelia が生きていると思い、歓喜のうちに死んでいったと考える A. C. Bradley の解釈 (252-3, 291) をはじめ、これまで多くの研究者が二人の死の妥当性やその悲劇性を論じてきた。それだけ素直に受け入れがたい結末とも言えるが、材源の結末をわざわざ変えた以上、Shakespeare はこの悲劇的な結末にこだわっていたと言えるだろう。

悲劇的な結末を Shakespeare の劇作術という観点から考えるとき、最終幕の Edmund の描写は大きなヒントを与えてくれる。Derek Cohen が言うように、Goneril と Regan に愛されていたことを知って突然改心するという最終幕の Edmund の心の動きは不可解である (382)。またすでに見たように、Edmund の死は Albany の一言で簡単に処理されている。Edmund が最終幕で突然改心し、その死に観客の意識が向けられることが妨げられているのは、悲劇的な結末、特に Cordelia の死に観客の意識を集中させるためだとは考えられないだろうか。Lear と Cordelia の死がこの作品を悲痛なものにしているのは確かだが、Lear の死以上に Cordelia の死がこの作品の悲劇性を高めているようである。

KENT　Vex not his[Lear's] ghost; O, let him pass. He hates him
That would upon the rack of this tough world
Stretch him out longer.
(5.3.312-314)

これは Lear の死の直後の Kent のせりふだが、もうこれ以上苦しまなくて済むという彼のいたわりの言葉は Lear の死の悲劇性を幾分薄めている。

KENT　Is this the promised end?
EDGAR　Or image of that horror?
ALBANY　Fall, and cease.
(5.3.261-262)

一方、これはCordeliaの死に対するKent、Edgar、Albanyのせりふであるが、Learの死に向けられる言葉と違い、Cordeliaの死の悲劇性を強調するようなせりふになっている。

5幕3場冒頭でEdmundはLearとCordeliaの殺害を命じており、その命令がCordeliaの死という重大な悲劇を引き起こす。ShakespeareはこのEdmundの行動に「人心がLearとCordeliaに集まるのを防ぐため」という動機を与えている[9]。しかし最終幕までLearやCordeliaの運命と直接関わることのなかったEdmundが、急に二人の運命を支配し、Cordeliaの死の原因となるのはいかにも唐突に感じられる。ここでのEdmundの行動は、庶子という出自が動機となっているこれまでの悪事の延長線上にあるものではなく、5幕3場で突然与えられた新たな動機による。また、LearとCordeliaの殺害を命じる以前に、Edmundが二人と関わることもない。唯一同じ場面に登場していた1幕1場でもEdmundは二人と言葉を交わしていない。こういった事情が、Edmundによって引き起こされるCordeliaの死を、不意に訪れた悲劇のように感じさせるのだと考えられる。

また、Cordeliaの死のすぐ後に伝えられるEdmundの死が観客の注意を引かない形であっさり片付けられているのは、同じ場面で描かれるCordeliaの死の悲劇的な雰囲気に観客の意識を集中させるためであったと考えられる。それまで悪党としての姿を全面に出していたEdmundが、Edgarの言葉に心を動かされ、GoneriltとReganの死を知って簡単に改心するのはあまりにあっけなく不自然に思える。しかしこの場面の最大の目的がCordeliaの死を描くことにあり、ShakespeareはそのためにEdmundを使っているのだと考えると、Edmundの行動の不自然さにも納得できる。Viceの性質を持つEdmundが悪事を行ったことを後悔し改心する姿は、Viceの枠組みを越えた個性的な悪党の姿だと考えることもできるが、それよりもむしろ、Cordeliaの悲劇的な死を成立させるためのものであると思われる。

この作品はLearとGloucesterの道徳劇的な人物造形及びEdmundのVice的な性質以外にも、道徳劇との類似点が目につく。登場人物が善と悪に二分されるということはしばしば指摘されているが、Learと3人の娘達の関係も、Gloucesterと息子達の関係も、道徳劇で「人間」をめぐって対立する悪徳と美徳の図式に重なる。この場合道徳劇の主人公である「人間」にあたるのがLearとGloucester、悪徳にあたるのがGoneril、Regan、Edmund、そして美徳にあたるのがCordelia、Edgar、Kentということになる。彼らの行動を見てみると、GoneriltとReganは「忘恩」と「好色」、Edmundは「裏切り」と「好色」、Cordeliaは「誠実」、Edgarは「孝心」、Kentは「忠誠」をそれぞれ体現しているようである。悪徳に誘惑され、だまされて堕落した「人間」が、苦難を経験して改心し、美徳に救われるという道徳劇の典型的なプロットは、CordeliaのLearとGloucesterのストーリーと一致する。また、Cordelia率いるフランスとブリテンの戦いおよびEdmundとEdgarの決闘は、道

徳劇で描かれる美徳と悪徳の争い「魂の葛藤」を彷彿とさせる。さらに Mack は、１幕１場の展開が美徳を装った悪徳が主人公と美徳を仲たがいさせるという道徳劇のエピソードと一致していると指摘しているが（58)、これは１幕２場の Gloucester 父子の場面にも当てはまり、「人間」が悪徳に誘惑されて堕落するという道徳劇の前半部分のプロットに対応している。

このような道徳劇との類似点を考慮すると、Bradley が指摘し（253)、おそらく多くの観客が抱くと思われる幸福な結末への願いは、道徳劇において最後に美徳が勝利することを期待するのと同種のものと思われる。*King Lear* において道徳劇の美徳にあたる人物は Cordelia、Edgar、Kent の３人だが、なかでも Cordelia は美徳を体現する最も重要な人物として描かれている。すでにみたように、Shakespeare の *King Lear* においては、Lear の高慢と怒りっぽさが材源よりも強調されているため、Goneril と Regan は単純な悪人として描かれることを免れている。また、Edmund をめぐる三角関係は、Lear との関係から離れたところで二人を描くことに役立っている。一方 Cordelia は、常に Lear との関係からのみ描かれ、劇の中盤で長く舞台上に姿を現さない間も、Kent や Gloucester のせりふによって Lear を救う人物として印象付けられる。

先行研究でも Cordelia の造形にキリスト教の思想がみられることはしばしば指摘されてきた。例えば D. G. James は、「我々はしばしば、Shakespeare が Cordelia を、彼女の姉たちが体現するこの世の邪悪さを浄化する慈悲と想像していたと感じる」と指摘している（120)。もっと最近では、A.D. Nutall も、「おそらく Shakespeare は Cordelia というキャラクターを考え出したときキリストについて考えており、観客もまた確実にそのように考えるように仕向けた」と論じている（312)。このようにもっぱらキリスト教的な救世主として印象づけられる Cordelia は、Goneril や Regan に比べ誠実さという美徳のみが強調されているとも言えるが、その平板さゆえにかえって美徳を体現する人物としての Cordelia の存在感が増しているとも考えられる。

開幕から４幕７場まで、Shakespeare は主筋と副筋の両方を誘惑 — 堕落 — 改悛という典型的な道徳劇のプロットをなぞるような形で展開してきた。しかし最終幕で、これまでの主筋と副筋の対応関係を崩している。Edgar は Edmund との決闘に勝つが、この場面は副筋での悪徳の敗北と美徳の勝利を視覚的に印象付ける効果がある。さらに Gloucester の死は Edgar の口から次のように説明される。

… But his flawed heart,

Alack, too weak the conflict to support,

'Twixt two extremes of passion, joy and grief,
Burst *smilingly*.

(5.3.195-198, italics mine)

'smilingly' という言葉は、Gloucester が最後に救済されたことを暗示している。このように最後まで道徳劇のプロットに従い、美徳の勝利と「人間」の救済を描く副筋に対して、主筋では美徳の敗北と死が描かれる。道徳劇で美徳が悪徳に勝利し、「人間」を救うことを期待するように、観客は *King Lear* においても Cordelia 率いるフランス軍が勝利し、Lear の王権を取り戻すことを期待すると考えられるが、その期待を裏切るように、Shakespeare は Cordelia を敗北させ、死なせている。Cordelia の死が観客にとって悲劇的なものと感じられる一番の原因は、美徳の勝利への期待が裏切られることにあるのではないだろうか。

Emrys Jones は、Shakespeare が描こうとしているのは、一人の男の転落と死という個人的な問題だけでなく、世界全体の崩壊であり、死の到来という個人的なテーマは、世界の終わりというもっと大きなテーマのなかに置かれていると指摘している（159)。道徳劇の「人間」がある特定の個人ではなく人間全体を描いていることを考えると、Shakespeare は *King Lear* で道徳劇的な構図を採用し、Lear を「人間」の位置に立たせることで、Lear 個人の悲劇を越えた人間世界全体の悲劇を描いているように思える。また、このように道徳劇との類似点に注目して、あらためて 1 幕 1 場から 2 幕 4 場までの Lear を見てみると、Shakespeare が Lear を高慢で怒りっぽい人物として描き続けた理由がはっきり見えてくる。道徳劇で「人間」が苦難を経験するのは、「人間」自身が悪徳にそそのかされ、罪を犯したためである。Shakespeare は、Lear の苦難の原因が Lear 自身の高慢と怒りっぽさにあると強調することで、道徳劇の主人公である「人間」と Lear を重ね合わせているのではないだろうか。先に引用した Cordelia の死に対する Kent、Edgar、Albany の言葉は、一人の女性の死を嘆くというよりも、Cordelia の死がこの世界全体の悲劇であることを暗示するようなせりふである。つまり、Cordelia の死が Lear にとっての悲劇というだけでなく、美徳の敗北を経験したこの世界全体の悲劇として描かれている。さらに道徳劇の劇構造を利用した Shakespeare の劇作術が明らかになってみると、庶子という出自が Edmund の悪事の動機付けになっているという事実は、一見彼の Vice 性を否定しているように見えて、実はそれこそが Edmund の最も Vice 的な要素になっているということがわかる。道徳劇で Vice が「人間」の悪徳を体現しているように、Edmund は Gloucester の姦淫という罪を体現しているのである。

King Lear の材源である *The True Chronicle Historie of King Leir* 自体が道徳劇的な作品であ

ることを考慮すると、Shakespeare は材源にみられる道徳劇的なプロットを狙い通りの劇効果を得るためにあえて形を変えて使っているのだと考えられる。喜劇的な結末をもつ材源と悲劇的な結末の *King Lear* では、作者のねらいがまったく異なる。材源はあくまで教訓劇の伝統の中で書かれている。一方 Shakespeare は、伝統的な道徳劇の構造を作品の悲劇性を効果的に演出するための道具として使っており、古いものを使いながら新しい効果を生んでいると言えるだろう。材源の劇が教訓的なせりふで終わるのに対して、Shakespeare の *King Lear* はその悲劇性を強調するせりふで幕を下ろす。

EDGAR　The weight of this sad time we must obey,
Speak what we feel, not what we ought to say.
(5.3.322-323)

この Edgar の言葉は他の登場人物だけでなく観客にも向けられているかのようである。Shakespeare は Edgar のせりふを通じて、舞台上で目にしたこの世の悲劇を十分に感じてほしいと観客に伝えているのではないだろうか。

2 幕以降、Lear はしばしば patience / patient という言葉を口にするようになる。

You heavens, give me that *patience*, *patience* I need! (2.2.460, italics mine)

No, I will be the pattern of all *patience*,
will say nothing. (3.2.37-38, italics mine)

Thou must be *patient* … (4.6.174, italics mine)

このように繰り返し言及される「忍耐」は、Lear だけでなくこの作品を観る観客にも必要とされるものである。Samuel Johnson は Cordelia の死にショックを受けて、その後何年もこの作品の結末を読むことができなかったと書いているが（702-704）、道徳劇とは全く異なる、観る（読む）者の忍耐を必要とするこの悲劇的な結末こそ、Shakespeare が *King Lear* において最も描きたかったものではないだろうか。

註

1 本稿は京都大学人間環境学研究科に提出した博士論文 *The Tradition of the Vice and Shakespeare's Villains in His Tragedies* の第 4 章に加筆・修正したものである。

2 *King Lear* の批評史は、相反する二つの解釈を提示してきた。一つは、この作品を魂の救済の物語とするキリスト教的な解釈であり、もう一つは、厳しい現実を提示する不条理の劇とする解釈である。前者の代表が 20 世紀初頭の A.C. Bradley であり、Lear は Cordelia が生きていると錯覚し歓喜のうちに息を引き取ったとする彼の解釈はよく知られている。一方、後者の解釈は 1960 年代によく見られた。二度の世界大戦と冷戦による世界的危機を経験した 1960 年代には、現実世界と劇中世界を照らし合わせ、この作品が提示する陰気で虚無的な側面に注目する批評家が多くみられるようになった。上演においても、例えば、Jan Kott の *Shakespeare Our Contemporary* の解釈に影響を受けて演出された Peter Brook の舞台が、*King Lear* の喜劇的な要素を意図的に省き、不条理な世界観を強調した演出で知られている。1970 年代以後は、*King Lear* を単純に救済の物語あるいは不条理の劇とする批評は少なくなったが、それでも特に最終幕の Cordelia の死を肯定的に解釈するか否定的に解釈するかという点で、*King Lear* の批評は大きく二つに分けられる。

3 例えば Jan Kott (121-122) や Emrys Jones (157-159, 188-189) などが中世道徳劇と Shakespeare の *King Lear* との類似点に注目している。

4 Shakespeare が *The True Chronicle Historie of King Leir* をどのような形で知っていたのかについては意見が分かれる。1605 年に出版された版と Shakespeare の *King Lear* には約 100 か所の類似点があることを指摘し、Shakespeare が 1605 年に出版されたこの劇を直接読んでいたに違いないとする Richard Knowles の説は説得力がある。Shakespeare が *The True Chronicle Historie of King Leir* を直接読んでいたとすると、この劇と Shakespeare の *King Lear* の間の相違点は、Shakespeare が劇作上の理由から故意に作り出したものと考えることができるだろう（Richard Knowles, 12-35)。*King Lear* の材源は、Geoffrey Bullough, ed. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare, Vol. VII: Major Tragedies* を参照。

5 王の名前は *The True Chronicle Historie of King Leir* と *The Historie of England* では Leir、*The Mirror for Magistrates* では Leire、*The Faerie Queene* では Leyr となっている。

6 *King Lear* からの引用はすべて、R. A. Foakes, ed., *King Lear* による。

7 "Mundus et Infans." *Three Late Medieval Morality Plays*. Ed. G. A. Lester. The New Mermaids, pp. 107-57 を参照。

8 3 幕 1 場で Richard は、自身を Vice と重ね合わせるような傍白をしている。'Thus like the formal Vice, Iniquity,/ I moralize two meanings in one word.' (John Jowett, ed., *The Tragedy of King Richard III*, 3.1.82-83)

9 EDMUND　　Sir I thought it fit
To send the old and miserable King
To some retention and appointed guard,
Whose age had charms in it, whose title more,
To pluck the common bosom on his side,
And turn our impressed lances in our eyes
Which do command them. With him I sent the queen,
My reason all the same; …
(5.3.46-53)

参照文献一覧

Bradley, A. C. *Shakespearean Tragedy: Lectures on Hamlet, Othello, King Lear, Macbeth*. New York: Macmillan.1905.
Bullough, Geoffrey ed. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare, Vol. VII: Major Tragedies*. London:

Routledge. 1973.

Cohen, Derek. "The Malignant Scapegoats of *King Lear*." *Studies in English Literature 1500-1900* (2009): 371-89.

Cushman, L. W. *The Devil and the Vice in the English Dramatic Literature Before Shakespeare*. Plymouth: Frank Cass. 1970.

Johnson, Samuel. *The Yale Edition of the Works of Samuel Johnson*. Vol.8. Ed. Arthur Sherbo. New Haven, CT: Yale University Press. 1968.

James, D. G. *The Dream of Learning*. Oxford: Clarendon Press, 1965.

Jones, Emrys. *Scenic Form in Shakespeare*. Oxford: the Clarendon Press. 1971.

Knowles, Richard. "How Shakespeare Knew *King Lear*" *Shakespeare Survey* 55 (2002): 12-35.

Kott, Jan. *Shakespeare Our Contemporary*. Trans. Boleslaw Taborski. London: Methuen. 1967.

Lester, G. A., ed. "Mundus et Infans." *Three Late Medieval Morality Plays*. London: Ernest Benn. 1981. The New Mermaids.

Mack, Maynard. *King Lear in Our Time*. London: Methuen. 1966.

Nuttall, A.D. *Shakespeare the Thinker*. New Haven: London: Yale University Press, 2007.

Shakespeare, William. *The Tragedy of King Richard III*. Ed. John Jowett. Oxford: Oxford University Press. 2000. Oxford World's Classics.

… *King Lear*. Ed. R. A. Foakes. China: C & C Offset Printing. 1997. The Arden Shakespeare.